

ハウスミカンの「にせ黄斑病」診断のポイントと対策



佐賀県果樹試験場 病害虫研究担当 井手 洋一

これからハウスミカンでは夏季せん定の時期に入り、平成二〇年度に向けたハウスミカンの準備が始まります。

ところが、ここ最近県内のハウスミカンでは「にせ黄斑病」が発生し問題になっています。

今回は、この病気の特徴、生態、対策のポイント等についてご紹介します。にせ黄斑病については、夏芽が発芽してから硬化するまでの対策が最も重要ですので参考にして下さい。

病原菌の生態と発生条件

にせ黄斑病は、SPROBOLONMYCES ROSEUS という酵母菌によって引き起こされる病気で、未硬化の新葉に感染します。

感染して数週間した後には、黄色い縁取りを持った茶褐色の斑点を生じ、病斑を生じた葉は落葉します。加温を開始してから、症状の発生に気づくことが多いようです。

症状が激しい場合はほとんどの葉が落葉し衰弱するので、次年度の花

芽確保が不可能になります。

ハウスミカンでは重要病害のひとつなので、

原因となる病原菌については、酵母菌の一種ですので、枝葉の表面等、どこにでも存在します。非常に病原性が弱く、よほど好適な条件が整わないと感染・発病しません。

ところが、ハウスミカンでは夏季せん定後に発芽を促すため、散水しハウス内を長期にわたって過湿状態とするため、病原菌の感染を著しく促してしまいます。

にせ黄斑病の発生には樹体栄養も関与し、一時的に多量の石灰を施用した場合にも発生が助長されます。

また、以前からにせ黄斑病発生園では、銅、亜鉛、マンガンの微量元素欠乏の樹が多いことが知られています。

さらに、地上部の枝葉の伸長が旺盛で、一見、健全に樹が健全に育っているように見えても、根張りが十分でないとい発生が多くなる傾向があります。

黄斑病との違い

カンキツは、黄斑病という糸状菌(かび)による病気も発生します。にせ黄斑病と同様に、茶褐色の斑点を生じ落葉します。

にせ黄斑病は黄斑病と異なり、



にせ黄斑病の罹病葉 (葉表)



にせ黄斑病の罹病葉 (葉裏)



にも黄斑病によって落葉し、衰弱した樹

斑点の周囲に黄色いリングができるのが特徴です。
黄斑病は古い樹で発生しますが、にせ黄斑病は樹齢を問わず若い木にも発生します。
また、黄斑病は殺菌剤の散布がうまくいかなかった場合のみに発生しま

すが、にせ黄斑病の場合は殺菌剤の散布とあわせて樹体栄養も強く影響します。
県内のハウスミカンで問題になっているのはほとんどが、にせ黄斑病です。

対策のポイント

まずは、石灰を一時的に大量に施用しないことです。pHの低い土壌については、セルカ等の有機石灰で少しずつ改善をはかってください。
次に重要なのが、根を地表面近くに十分に張らせることです。ハウスミカンに限らず、施設栽培を行うと地上部と地下部の温度にアンバランスが生じます。

地上部は加温の影響で旺盛に枝葉を伸ばすのに対し、地下部については冷え切ったままで、十分に活動していない場合があります。
この地上部と地下部のアンバランスを解消するためには、比較的温まりやすい地表面近くに細根を十分に張らせることが重要です。

この対策として、客土を施した園ではにせ黄斑病の発生が徐々に少なくなっています。収穫後のかん水も非常に有効です。
あわせて、堆肥やくん炭等の施用も実施し、多くの細根を地表面近くに張らせてください。

また、にせ黄斑病発生園では、亜鉛、マンガン等の微量元素欠乏の樹が多いことを前記しました。

これらの微量元素は、葉面散布で一時的に補給することはできますが、長期的な効果は得られません。

また、土壌中に微量元素をいくら施しても、根に十分な活力がないと結果的に微量元素欠乏を引き起こしてしまいます。
微量元素欠乏対策としても、根活力を高めることは非常に重要ですので、力を注いでください。

あわせて、発芽期から展葉硬化期にかけて、そうか病対策としてポルドー液、銅水和剤、ジマンダイセン水和剤等を二〇〜三〇日間隔で予め散布しておくことで、にせ黄斑病の発生も抑制されます。

ただし、ハウス内で散水が行われる場合は、散水による薬剤の流亡を考慮する必要がありますので、簡易雨量計を置いて散水量を計測しておくことが便利です。

黒点病に対する効果を応用し、多くても累積二〇〇mm程度を目安に再散布が必要です。



早期加温タイプの収穫が終わると、中期、後期と連続して収穫が続いて忙しいことと思えますが、収穫後、かん水すら行わずにそのまま放置しておくことが、にせ黄斑病の発生を助長してしまいます。

これまでの内容を参考に、対策を講じてください。